異世界の料理人

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界の料理人

【Ｎコード】
Ｎ６４９８Ｚ

【作者名】
そら

【あらすじ】
鈴野尊（２７歳）、元料理人。命の灯が消えかかった娘の命を救うには、女神ディオネが管理する「ディオネシア」という名の異世界で“俺ができること”をしなければならない。娘とともに異世界に召還された尊は、異世界の食文化に愕然としつつも、食材を集めて元料理人としての腕を揮う。―“俺ができること”とは？―女神の審判の日までの元料理人の異世界奮闘記！　・・・になるといいなー。※３日程度で１話の更新になるかと思います。ごゆっくりお待ちいただければ幸いです。

プロローグ（前書き）

プロローグです。とっても暗いです。

プロローグ

1．プロローグ

白のパイプベッド、白の布団、白のカーテン。室内をほぼ白に統一されたこの病室でベッドに娘が横たわっていた。病室のカーテンは閉めているのだが、照明とカーテン越しの秋の日差しで明るい。
俺は、病院に入院している娘に会うため、仕事の合間に抜け出してきたのだ。

「ぱぱ・・・」
時々、うなされたように俺を呼ぶ。
「唯・・・」
俺は、娘をただ見ていることしかできない。

鈴野　唯。
今年、幼稚園の年長になった娘。生まれてすぐに母親を失ったため、母親を知らない。非情な運命のもとに生まれた娘だけど、本当に良い子に育ってくれた。男手一つ育てた・・・と言えればカッコいいのだけれど、残念だが違う。娘を良い子に育てたのは、妻の母親、娘の祖母だ。祖母は学校の先生をしていたこともあるそうで、本当に厳しく、優しく、愛情をもって育ててくれたと思う。

その祖母もいない。昨年、唯の幼稚園入園を見届けると、まもなく亡くなった。もともと、心臓が悪かったらしく、体調を崩してからあっという間だった。
唯もその悲しみからようやく立ち直り、元気な娘の笑顔が見られたと思ったら、1年も経たずに高熱を出して倒れた。

――――原因不明

医者から聞かされた言葉はそれだった。突然、幼児が高熱を出すということは、知識として知っていたが、原因がわからないとなるとそうとも言っていられない。
自宅療養1カ月、入院が5カ月にも及ぶ闘病生活で、ゆっくりと衰弱していく娘をただ見ていることしかできなかった。

思えば、俺の妻、幸も生まれつき体が弱く、子供の頃から高熱を出しては寝込んでいたという。妻と出会ってからも、何度か熱を出して寝込んでいたことがあった。
しかし、これまで風邪をこじらせることもなく元気だった娘が突然高熱を出した時、不覚にも妻の姿をダブらせてしまった。それがいけなかったのか・・・。

俺は娘のために働くことしかできなかった。親もなく、孤児だった俺に頼れる親戚はいなかった。本当はいるのかもしれないが、産みの親を知らない俺には分からない。妻の幸も父親を早くに亡くし、母子家庭だったという。そちらの親戚もなく、天涯孤独に近い。

働いて入院費を稼ぐ。
高校を中退した俺が町の大衆食堂の厨房で働きはじめ、今はその食堂で料理人として朝から晩まで働いた。医学の知識もなく、他に娘に何もしてやれない今の俺に出来ることを必死にやった。娘が元気になることを信じて、娘の元気な笑顔が見られることを信じて――――

「ぱぱ・・・」
唯の目がうっすらと開いた。
「唯、パパはここにいるぞ」
唯の手をとり、声をかける。

「ぱぱ・・・。ここ、・・・夜なの？・・・・まっくら・・・」
今はまだ昼過ぎ、カーテンは閉めているものの日差しで明るいにもかかわらず。

――――目が

「――――っ」
唯の言葉に奥歯をグッと噛みしめ、
「唯、そうなんだ。今は真夜中なんだよ。パパのこと、わかるか？」
声が震えないように、そっと、そっと声をかける。
「・・・うん」
焦点の合っていない目でこちらを向こうとする。声のする方を向いたという感じだ。
「ぱぱ・・・あのね・・・、ぱぱと・・・もっと・・・おはなししたかった・・・。ぱぱと・・・あそびたかった・・・」

――――唯

考えてみれば、唯は産まれてすぐに母親を失い、親は俺だけだった。幸の母親が母親代わりだったが、代わりだ。親じゃない。俺だけだったのに。唯と顔を合わせるのは、朝から幼稚園に送るまでと幼稚園のお迎え、夜の少しの時間だけだった。休日もほとんど仕事だった。
俺は、生活のためと仕事に明け暮れ、満足に遊んであげられなかった。構ってあげられなかった。

唯の手を両手で握りしめ、唯に声をかける。
「それじゃ、唯。元気になったら動物園行こうか。唯、行きたがってたよな。暖かくなった海でもいいぞ、唯」
そっと声をかけているつもりだったが、後のほうは懇願に近いもの

だった。

――――唯はわかっているんだ。俺と過ごせる日が、もう長くないことを

「ぱぱ・・・あのね・・・・」

弱い呼吸で唯は言葉を続ける。

「・・・だいすき・・・・」

弱弱しい言葉でもはっきりと俺の耳に届く。

「唯っ」

――――神様

「唯、パパも大好きだぞ」

その言葉に唯がかすかに微笑んだ。

「えへへ・・・・」

微笑みが消えると、ゆっくりと唯の目が閉じられる。わずかに保っていた唯の頭や手の力も抜けていく。

――――神様、この世界にいるのなら、いや、この世界じゃなくても。

――――神様、助けてくれ。唯を、唯を助けてください。

『助けたいですか？その子を』

ベッドの唯にしがみつき、声なき声をあげていた俺に響いてきた言葉だった。

プロローグ（後書き）

はじめまして、そら　と申します。
拙い文章にもかかわらず、ここまでお読みいただきありがとうございます。

女神の選択（前書き）

２話目です。
表現の仕方が難しかったのですが、深層世界といいますか、精神の世界です。
神様との邂逅シーン。

女神の選択

2. 女神の選択

顔を上げ、目を開くと世界は真っ白だった。何もない世界。そんなところに俺はいた。先ほどまでしがみついていたはずの唯の姿も見えない。身体の感覚もあやふやだ。

――ここは・・・？

『この子を助けたいですか？』

頭に響く女性の声、とても澄んだ声で心地よい。だが、その余韻に浸る間もなく、叫ぶように声を上げた。

――助けてくれっ！

『この子の命の灯は消えかかっています』

――っ

『この子は、もう、この世界で生きていくことはできません。ですが、私の世界ならそれも可能です』

――助けてくれっ！娘が助かるなら俺はどうなっても構わないから！

頭で考えた言葉ではなく、心の声を高らかに叫ぶ。唯がまた元気になってくれるなら、俺自身は本当にどうなってもいい。結果的に唯を悲しませることになるかもしれないが、それでも強く思った。

『貴方も一緒です。この子を助けますが、貴方は私の世界で“貴方ができること”をなさってください』

――俺にできること？

『そうです。それが何かは、貴方が私の世界で考えてください』

――そんなことで・・・

そんなことでいいのか？ようやく頭が働いてきた。しかし、娘を助ける代償が“俺にできること”をするって・・・。

『これは選択です。このままこの世界で貴方は生きていくこともできます。この子は諦めていただかなくてはなりませんが』

ようやく働き始めた頭が、また、この一言で停止した。

――唯を助けてくれっ！

思いのままに叫ぶ。今の望みは、唯一の望みはそれだけだから。

『・・・・わかりました。思いは強いようですね』

その言葉に安堵した。これで唯は助かるんだ。何の保証もないにもかかわらず、そう思った。

幸いというか、唯以外の身内と呼べる存在がいないので、唯が一緒のようだし、この世界に心残りはない。職場の仲間もいることはいるのだが、唯の命と引き換えと言われればそうも言ってられない。

そういえば、このところ幸の墓参り行ってないな。まぁ、幸も理解してくれるだろう。唯のためなんだから。墓前に報告できなくて悪いが、仕方ないだろう。

――それにしても、あなたの世界？

『そうです。こことは別の世界。人が生きる別の世界です』

――俺ができること？

高校を中退して大衆食堂で働いただけの俺には、できることなんてほとんどないと言っていい。強いてあげるとすれば、料理ぐらいか。仕事でやってたからな。料理人の端くれとして、人並み以上にできることと言えばそれくらいか。異世界で料理屋でも開くか。異世界にもこの世界のような食材ってあるのかな。まぁ、人が生きる世界だから大丈夫か。

『1年後、貴方が何をなさったか確認しましょう』

つらつらと思考に浸っていると、また、頭に声が響いてきた。そうだ、これは代償・・・。唯の命と引き換えなんだ。適当に考えていいものじゃないんだ。俺ができることを必死に考えないと。

しかし、もし俺が代償を支払えないと唯はどうなるのだろう？引き換えは唯の命。まさか・・・

――もしも、もしもだ、俺が、その、何もできなかったら？

『・・・・すべては無かったことになります。今この時点に戻り、この世界で貴方は生き続け、この子の命はここで失われます』

――っ

やはり、そういうことなのか。身体の感覚がないのに、冷や汗が流れたような感じがする。

考えろ、俺にできること。何ができる？これまで唯に何もしてやれなかったんだ。今、唯の父親として俺にできることを考えるんだ。

――なぁ、幸。俺って何ができるんだろうな。唯の命がかかっているのに、何もできないのか？

――なぁ、唯。パパは何ができるかな。唯に何もできなかった俺にもできることがあるかな。

『先ほども言いましたが、何ができるかは私の世界を見て、考えてはいかがでしょうか？』

――ごもっともです。

示すべき相手に助けられてしまった。ガックリと気を落とす俺に、

『そろそろ時間になります。よろしいですか』

――ああ。唯を、唯を助けてくれ。

『わかりました』

その言葉とともに真っ白なだけだったこの世界に強い光が差し込む。眩い光に無意識に目を閉じてしまう。

そのあと少し間があった。目を瞑ったままでも、強い光を感じる。

再び、女性の声が響く。

『・・・・選択はなされました。・・・ようこそ、我が“ディオ

ネシア”へ・・・』
その言葉を最後に俺は意識を失った。

『尊さん、楽しみにしていますね』
尊にそんな言葉が届いていたのだが、意識のない尊は聞くことができなかった。

女神の選択（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

女神・ディオネ登場です。・・・が、女神様、名のっていませんね。

神様の表現と尊の表現が微妙に違うんですよね。

異世界へ（前書き）

ようやく異世界に旅立ちました。
ここから異世界編です。元気になった唯の姿を少しずつ表現していきます。

異世界へ

3　異世界へ

朝、目が覚めるのと同じように、目が覚めた。どこかはわからないが、ベッドのようなものに仰向けに横たわっているようだった。寝起きは悪い方じゃないが、まだ頭がボーっとしている。

何があったんだ？――――そうだ、神様に会ったんだ。
神様？――――神様でいいんだよな。会ったんだ。
それで・・・どうしたんだ？――――唯のことを祈ったんだ。

――――唯っ

そこまで考えて一瞬に覚醒した。慌てて俺の周りに視線を向ける。よくわからないが、どこかの部屋にいるようだ。病院の白を基調とした病室とは違う、木目調の部屋・・・というか、木造りの部屋。おそらくこちらも木造りであろうベッドに俺はいた。

唯は、俺の隣にいた。

スヤスヤと眠っているように思える。病室にいたときのように熱にうなされているわけでもなく、穏やかな表情だった。愛らしい娘の寝顔をずっと見つめていたいと一瞬考えたが、やっぱり確かめたい。

唯に声をかけるため、身体を唯の方へ向けようとすると、唯の小さな手が俺の服を握っていることに気付いた。離されないように、唯がいつも俺にする癖のようなものだ。その手を潰さないように、ゆ

っくりと唯の方へ身体を向ける。

「唯？」

そっと声をかける。

すると、唯の目がゆっくりと眩しさに耐えるかように開いていく。

「・・・ぱぱ？」

寝ぼけているような声だが、病室にいたころに比べてはっきりとした声で俺を呼ぶ。

「唯、パパだ。わかるか？」

「うん。おはよう、ぱぱ」

唯だ。元気だったころのいつもの唯だ。

「ああ、おはよう」

そう返すと、唯は俺に抱きついてくる。

おはよう、と言ったものの、時間の感覚がないので朝なのかどうなのか、わからないが。

「ぱぱ、ここ、どこ？」

ひとしきり抱きついたあと、周りをキョロキョロと見回し、俺に聞いてくる。

「どこなんだろうなー」

俺にもよくわからないので、そのまま答えた。

この部屋には、俺と唯が寝ているベッド1つと、クローゼットらしきものが1つ。大きな扉が付いているのは、この部屋の出入り口だろう。木窓が一つ付いているが、すぐ外に樹が生い茂っており、風景は見えない。俺の記憶にある場所じゃない。ここが異世界なのか？

「お姉さんがいってた、いせかい？」

唯につられてきょろきょろと見回していると、唯がそんなことを言

った。

――――お姉さん？

「唯、お姉さんって誰だ？」

「しらないひと。声だけきこえた」

俺に選択を示した神様だろうか？俺も姿は見ていない。声が頭に響いてきただけだ。

「そのお姉さんが異世界だって言ったのか？」

「うん。いせかいってところにいくって、いってた。ぱぱもいっしょ」

「そうか・・・」

よくわからないが、唯のところにもあの神様は現れたらしい。とりあえず、唯の頭を撫でておく。

「うん」

嬉しそうに目を細めて返事をする。唯は頭を撫でられるの好きだからなぁ。

頭を撫でていた手を、おでこのところにもってくる。

「ぱぱのて、あったかい」

――――うん、熱はない。唯は本当に元気になったんだ。

「あったかいか？」

「うん、いつもひんやりしてた」

そう言って、自分の手をおでこの上の俺の手に重ねる。唯の手は少しひんやりしているが、生きている温かさだ。

「唯、もう少し寝ていいぞ」

何せ、病み上がりだからな。いくら元気になったからといって、す

ぐに今までどおりにさせるわけにはいかない。
「ゆい、ねむくないよ？」
声もしっかりしているから本当なのだろう。それでも無理はさせたくない。
「病気が治ったばかりだからな。眠って、しっかり治しちゃおうな」
不思議そうな顔で俺を見てくるが、納得したのか、うん、と頷いて目を閉じる。
聞き訳の良い子だな。

ここは神様のいう異世界なのだろう。壁紙のない木の壁、アルミサッシのない木窓、天井に目を向けても照明器具もない。夜になったら明かりはどうするのだろうか。異世界というより時代遡行だな。
この世界で俺にできること、この世界をよく見てみないといけないな。

「ぱぱ」
目を瞑ったままの唯が声をかけてくる。眠くないのだろう。俺に言われたからか目は瞑っているが。
「どうした、唯」
「あのね、どうぶつえん行きたい」

普段の唯は我がままを滅多に言わない。普通の幼稚園児のような駄々をこねるということもない。それなので、唯が行きたいというところには連れて行ってあげたいのだが・・・。あるのか？動物園。

「うーん、動物園なぁ」
「いせかいに、ないの？どうぶつえん」
悲しそうな顔をして聞いてくる。
「動物園さがしてみような」
ひとつ目標ができた。この世界で動物園があるか確認してみよう。

「うん！」
よかった、笑顔になった。そろそろ、俺までここで寝ているわけにもいかないか。
そう思い、身体を起こそうとしたその時、部屋の外から足音が聞こえてきた。

———コン、コン

「目を覚まされましたか？」
扉の外から女性の声が聞こえた。

異世界へ（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。

唯、元気になりました。
これから元気な唯を表現できるのは、書く方も嬉しいです。

※これまで誤字脱字等ございましたらお知らせください。投稿前に確認してはいるのですが、自信がないのでお願い致します。

フレイア（前書き）

尊と唯以外の人物が登場です。はじめはフレイア。

フレイア

4　フレイア

「目を覚まされましたか？」

扉の外から聞こえてくる声に反応できず、扉をまじまじと見てしまっていた。

「ぱぱ？」

唯の声にハッとして、とりあえず声をかけてみる。

「あー、はい」

と言っても何を答えればわからず、よくわからない返事になってしまったが。

———カチャリ

入ってきたのは、シルバーブロンドの髪が腰のあたりまである、美人さんだった。年頃は、俺より少し上、３０代半ばと思われる。開いた扉の音に唯が驚いたのか、俺にしがみついてきた。

その美女のプラチナゴールドの瞳が俺を捉える。

「お加減はいかがですか？」

薄桃色の唇から発せられる声は、とても澄んでいて、神々しく思えた。

驚きに目を見開いていた俺に、再度、声を掛けられた。

「あー、はい。大丈夫です」

本当に大丈夫なのか、よくわからないが。

とにかく俺自身に体調の不良は感じられない。唯の病み上がりではあるが、元気そうに見える。

「よかったです」
プラチナゴールドの瞳が安堵の色を示す。
ニコニコとこちらを見ているが、この美女は誰なんだ？　普通に考えれば、この部屋というか家の持ち主なのだろうが。
「ぱぱ？」
先ほどから俺にしがみついている唯が、その瞳を美女に向けたまま俺を呼ぶ。

「こんにちは」
唯に向けた言葉なのだろう、美女が唯に視線を向け、いっそう柔らかく声をかける。ベッドに横になっている唯の視線に合わせるためか、少し屈んだ。その拍子に、見事なシルバーブロンドがサラリと広がる。

「ぱぱ」
どうしたらいいのかと唯がこちらを向く。
そんな唯を安心させるように頭を撫でる。父子家庭であり祖母に育てられた唯は、幼稚園に通うようになってからも結構人見知りすると聞いたことがある。
頭を撫でてもらって嬉しいのか、唯は目を細めて美女の方を向く。
「こんにちは」
唯が美女に声をかけた。美女の瞳がさらに柔らかくなる。
「はい、こんにちは。お名前は何ていうのかな？」
「えっと、すずの、ゆい」
唯がはずかしそうに答えた。“鈴野”という姓はほとんど聞こえなかったが、名前ははっきり言えた。
美女は少し考えたあと、

「ユイちゃん、でいいのかな？　私はフレイアです。よろしくね」
「うん、えへへ」
唯が嬉しそうに笑って、俺の服をギュッと握ってくる。

「あっと、俺は鈴野尊です。それと、ここは・・・・？」
美女改めフレイアさんがこちらに視線を向けたので、流れに乗って自己紹介した。俺だけ名のらないのも変だったので丁度よかった。

フレイアさんは、またも少し考えたあと、
「はい。タケルさんですね。ここは私の家です。詳しい話は、むこうの部屋に夫がいますので、そちらで」
フレイアさんは既婚者でした。まぁ、俺は今でも妻だった幸一筋だから関係ないが。

「変わった服装ですが、どちらの方ですか？」
唐突にフレイアさんが聞いてくる。

さて、何と答えるか。
シルバーブロンドの髪にプラチナゴールドの瞳。そして、おそらく異世界。にもかかわらず、日本語が通じている。
そう、会話は日本語だった。俺は外国語が話せないし、幼稚園児の唯に話せるわけがない。

日本という国から来ました、と言って大丈夫だろうか。唯のことで異世界に行くと決めたことに後悔はまったくないが、言葉の問題や生活の問題をまったく考えていなかった。
まぁ、俺にあの段階でそこまで考えられるわけがないのだが。

難しく考えても仕方がない。
「あの、日本という国から来ました」

もう、そのまま答えることにする。フレイアさんの今の対応をみても、おかしな態度をとられることはないだろう、と判断したからだったが。
「ニホン、ですか」
フレイアさんが初めて難しい顔をした。おそらく、聞いたことがないということなのだろう。

フレイアさんはそのまま言葉を発せずに考えている。
急に黙ってしまったフレイアさんと俺を唯は交互に視線を動かしていた。そんな唯に気付いた俺とフレイアさんは、唯に笑顔を向ける。

「わかりました。詳しくは夫とともにお伺いしますね」
そう言って、いったん保留にすることを提案された。俺も異存はないため頷く。

「おーい、フレイア？」
離れたところから、フレイアさんを呼ぶ声が聞こえた。おそらく、先ほどから会話に出てくるフレイアさんの夫なのだろう。

「はーい、今行きます」
呼びかけにそう答えて、俺たちの様子を伺う。
「では、お話をお聞きしたいので、来ていただけますか？　おなかも空いているでしょうし」
その声と同時に唯のお腹から、クゥという音がする。
唯は少し顔を赤らめたかと思うと、俺の胸に顔をうずめる。
うん、はずかしかったのだろう。

フフッ、と笑ったフレイアさんは、

「ユイちゃん、おいしいご飯を用意するね」
そういって、部屋を出て行こうとするので、俺は唯を抱きあげて、
ベッドから降りることにした。

フレイア（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。

フレイアさん登場！・・・と、その夫が声だけ登場です。

どんどん、登場人物が増えていく予定？たぶん。

ディスケス（前書き）

あけましておめでとうございます。
「異世界の料理人」ともども、本年もよろしくお願い申し上げます。

ディスケス

5　ディスケス

フレイアさんの後に続き、今いた部屋を出て廊下を少し歩くと、先ほどより大きな部屋に出た。部屋には、横に2名ずつ掛けられる大きなテーブルが1つ。椅子も4脚。大きな木窓もあるが、ここも外に植物が生い茂り、風景を見ることはできない。壁は作り付けの棚となっており、いろいろ置いてあるのがわかる。

現代風にいえばリビングダイニングといったところだろうか。目算だが、8畳くらいはあると思う。

その部屋に男が一人、椅子に座ってこちらを眺めていた。
見た目は、俺よりひと回り上くらいの年齢。赤の短髪。瞳の色は深紅かブラウンか。ここからではハッキリと色がわからないが、初めてみる瞳の色だ。
彼がフレイアさんの夫なのだろう。フレイアさんの隣に並んでも遜色ない男前だった。

「おっ、やっと起きてきやがったか」
その男がフランクに声をかけてきた。
「はい、声をかけたときには気がついていましたよ」
そう、フレイアさんが答える。

「鈴野尊です。ご迷惑をおかけしてます」
そう言って、軽く頭を下げる。社交辞令ではあるが、当たり障りのない言葉をかける。日本人の性だな、などとどうでもいいを考えて

しまう。

ちなみに唯は、抱きあげられた俺にしがみつき、顔をうずめたままである。

「なにが迷惑なのかよくわからんが、まぁ、いい。お嬢ちゃんは大丈夫か？」

「はい、ありがとう・・・ございます」

もう一度、頭を軽く下げて、唯に、あいさつ、と軽く促すと、唯が頭を上げて男の方を向く。

「ゆい、です」

言葉とともに頭が少し動いたのは、お辞儀をしたかったのだろう。

「おう、ディスケスだ。よろしくな」

そう言ってニカッと笑う。笑うと思ったより若いな、とも思う。もしかすると俺より少し上くらいの歳なのかもしれない。

唯は、少しびっくりした表情を浮かべたあと、パッと笑顔になった。

「まぁ、立ち話もなんですから、座ってください」

夫の横で様子をうかがっていたフレイアさんがテーブルの椅子を勧めてくるので、唯を抱いたまま椅子に座ろうとするが、唯がモゾモゾ動いたので床に降ろしてやると、自分で椅子に座ろうとした。

―――唯、その椅子は大人用で、しかも少し高くなっているから、自分で座るのは難しいぞ

５歳になる唯の身長は、１００ｃｍくらい。椅子の座面の高さは、５０ｃｍくらいだろうか。腰の高さくらいある椅子に座るのは初めてだろう。俺たちが暮らしていた部屋は、畳にちゃぶ台みたいなものだったし、幼稚園でもそんな高さの椅子はなかったはずだ。椅子が倒れないように押さえているのだが、唯は、うんしょ、うんしょ

と擬音が聞こえるように頑張っている。

「かわいいな」

「はい」

そんな声が聞こえてきた。視線を向けると2人が微笑ましく見ている。

———たしかに唯は可愛いが、誰にもやらんぞ

そんなことを考えているうちに、唯は登頂に成功したらしい。チョコンと椅子に座って、横に立っていた俺を見上げる。

「ぱぱ、できた！」

満面の笑みで見上げてくる唯は、天使だった……コホン、可愛い娘だった。

「よくできたな」

ご褒美に頭を少し強くなでてやると、その強さに目をつぶってしまったが、笑顔のままなので大丈夫だろう。

そんな微笑ましい雰囲気のあと、俺も席に着く。

「改めて自己紹介をするが、俺はディスケス＝ニクス。こっちは、フレイア＝ニクス。俺の妻だ」

そう言って、ディスケスさんは自分とフレイアさんの自己紹介をした。そのまま視線を俺に向ける。

「俺は鈴野尊。尊が名前で、鈴野は姓…家名です。それで、こっちが唯。俺の娘、です」

姓、と言ったときに怪訝そうな顔をされたので、家名と言い直した。

「スズィノ…家名なのか」

発音が微妙に違う気がするが、そこは流した。そういえば、フレイアさんも俺たちが名のったとき、名前の方を呼んだな。すずの、という言葉が聞き取れなかったのかとも思ったが、家名と思わなかっ

たからなのかもしれない。この世界は、名前＝姓なのだろう。『ニクス』というのが彼らの家名か。

「まぁ、尊、唯と呼んでくれれば構わない」
つい、普段の話し方になってしまったが、2人とも表情が変わった感じがないので、それで通させてもらう。丁寧に話すのは慣れていないので、おかしなことを言いそうで、さっきから怖かったのだ。
「わかった。俺もディスケスとか、ディーとか、父様とか、パパとか適当に呼んでくれ」
「わたしもフレイアと呼んでください」
……一部、変な言葉が混じっていたが、突っ込んでいいのだろうか。ディーが愛称なのだろうことは推測できるが。突っ込んでも仕方がないので流そうとしたところ、ディスケスさんがつまらなそうな顔をした。このおっさんは、突っ込んでほしかったのか…。

「さて、まず何で2人がここにいるのかを説明しないとな」
和やかな雰囲気から一転して、少し硬い雰囲気になったためだろうか、唯は口を挟まず大人しく話を聞いている。
ディスケスさんが、いきなり本題に入ってきた。
どのようにこの世界に来たのかはわからないが、何らかの経緯があって俺たちは保護されたのだろう。2人が悪いタイプの人間には見えないので、その辺りの事情を教えてほしいと思う。
「ああ、なぜ俺たちがここに？」
俺の問いに、私が説明しましょう、とフレイアさんに代わったのだが。

「神の啓示を受けたのです」
神妙な表情で、フレイアさんは、そう言った――――

ディスケス（後書き）

ディスケス登場の回です。
唯が、うんしょ、うんしょと椅子によじ登る回でもあります（笑）

啓示（前書き）

第６話です。
この世界では、異世界の存在が当然あるものとして認識されています。

啓示

6　啓示

「神の啓示を受けたのです」
神妙な顔で告げたフレイアさん。

「神の啓示、ですか」
「ええ、夫とともに森に行け、と」
フレイアさんが神妙な面持ちのままそう言う。啓示そのものは、単純なもののようだ。

「あぁ、俺は毎日街はずれの森に行って、狩りをしているからな。」
「そうなんです。普段は、ディーが一人で森に行ってくれるのですが、神の啓示があったものですから私も同行しました」
「まぁ、神の啓示なんて、そうそうあるもんじゃないが…」

その後、2人が森に行ってみると、森の少し開けたところに俺と唯が倒れていたらしい。ディスケスさんが俺を背負い、フレイアさんが唯を抱いて、そのまま森を抜け、この家に戻ってきたとか。

「それにしても、神の啓示というのは？」
少なくとも、俺にはそんなご大層な出来事が起こった経験はない。あえて言うなら、病室での神様？との邂逅くらいか。しかし、あれは“神の啓示”というものとは違う気がする。
「あぁ、フレイアはもともと神官だからな。神の啓示っていうのは、ある程度の神官が、直接、女神から言葉を賜ることだ。……でいいんだよな？」

「はい」
フレイアさんがニッコリ返事をする。フレイアさんは神官だったのか。

「それで、お前たちはどこから来たんだ？」
その質問に先ほどフレイアさんに言ったままを答える。
「日本、というところからです」
「ニホン…、聞いたことないな」
ディスケスさんは怪訝そうな顔をして何かを考えるようなしぐさをする。

「どうしてあの森にいたのかは、わかりますか？」
ディスケスさんが考え込んでしまったようで、今度はフレイアさんが聞いてくる。

ここで、唯のこと、異世界に来ることになった経緯を話すかどうか迷ったが、この2人にならと、俺は話した。

「渡世人（とせびと）か・・・」
ディスケスさんが、つぶやくようにそう言う。ディスケスさんもフレイアさんも俺の話に少し驚いていたようだが、俺が想像していたような驚きは示さなかった。

もともと、神の啓示があり、行ってみると人が倒れている。何らかの事情があることは考えなくてもわかることだ。それも神様が関わっているほどの。

「とせびと？」
俺の疑問にディスケスさんが答えてくれた。
「あぁ、渡世人。女神ディオネの意思により、この世界に来た人間

をそう呼んでる」

この世界『ディオネシア』には、女神の意思により、この世界に渡ってきた人間が少ないながら何度かあったらしい。

女神ディオネ。

この世界では、創造神といわれており、フレイアさんはその教団の神官をしていた、とのこと。

また、この世界に渡世人が来る時には、教団の神官に何らかの啓示があることもわかっている。2人も俺たちを保護したとき、真っ先にその可能性を考えたらしい。

少なからず存在した渡世人。彼らは、この世界で様様な文化や技術を提供した。例えば、言葉であったり、魔法であったり。農法というものもあったらしい。

そう、魔法。

この世界には魔法がある。

…といっても、魔法を使えるのは一握りの人間だけで、普及しているとは言い難いらしいが。その代わり、その魔法士が創る魔法具というのが一般には出回っており、生活の一部として出回っている。魔法そのものとは違い、例えば、火を付ける、明かりを灯す、など簡単なことしかできないらしい。

もともと、この世界にも魔法というものはあったらしいのだが、魔法具という概念がなかったらしく、一般庶民には、王侯貴族などが使う未知の技に近いものであった。

しかし、1人の渡世人が魔法具という概念を持ち込み、庶民に普及

させたらしい。

「さて、これからどうするか、だな」

ディスケスさんとフレイアさんが一通りこの世界の説明をしてくれたあと、ディスケスさんが今後のことを尋ねてくる。

渡世人といっても、国や教団は基本的に無干渉。過去に渡世人を国や教団で保護しようとして神の怒りをかった、ということがあったのが原因らしい。詳しい話が庶民には伝わっていないため、本当の話かどうかわからないが、今も無干渉を貫いていることから何らかの出来事はあったのではないかといわれている。

「その前にお昼にしませんか？　時間もだいぶ経っていますし」

フレイアさんが休憩しようと提案してくる。そういえば、唯はお腹が空いていたんだった。

ふと、唯の顔を伺うと、少し眠たそうにしながらも俺たちの話を聞いている。唯には難しい話だったろうし、退屈だったんだろう。それでも大人しくしている唯は、本当にいい子だと思う。

「唯、大丈夫か？」

「うん」

「まぁ、そうだな。フレイア頼む」

フレイアさんが椅子から立ち上がって、隣の部屋に行く。おそらく、そこが台所なのだろう。

隣の部屋からカタカタ音がしたと思ったら、数分の後に深めの木皿などを持って戻ってきた。そして、各人のまえに木のスプーンを置く。木皿は重ねたままテーブルの端に置いた。

もう一度、隣の部屋に戻って、持ってきたのは鉄製の寸胴鍋らしきものだった。湯気が経っていることから、煮込みか何かだろうか。

「もうちょっと待ってくださいね」
そう唯に声をかけ、最後にコッペパンらしきものを持ってくる。唯は待ち切れなさそうに、視線を寸胴鍋とパンを交互に見ている。

「お待たせしました。今日はご馳走ですよ」
フレイアさんはニッコリ笑って寸胴鍋のふたを開け、中身を木皿に取り分けて各人に配る。

ほぼ透明のスープの中には、ジャガイモらしきもの、ニンジンと思わしきもの、茄子と思われるもの、あとは丸い玉ねぎのようなもの。それらが入っていた。

……原形のまま。

「ぱぱ……」
とても困ったような顔をして俺を見上げる唯。
祖母が亡くなってから、唯のご飯はすべて俺が作っていた。仮にも料理人だったので、唯のご飯だって手間をかけて作っていたのだ。

———わかる。わかるぞ、唯。野菜そのままを放り込んだ鍋なんて食べたことないもんな。

啓示（後書き）

『渡世人』は、この物語上の造語です。

本来、『渡世人』はトセイニンと読み、博徒（現代のヤクザ）を指します。

この物語では、『渡世人』をトセビトと読ませ、（異）世界を渡った人という意味を持たせています。

以上、補足でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6498z/

異世界の料理人

2012年1月5日21時09分発行